

「私大連フォーラム2022×大学時報連動企画」

# 社会共創活動による 教育効果について

## ーコイズと物流株式会社との 取り組みを通じてー

田中康仁

流通科学大学  
商学部マーケティング学科教授

### 1 流通科学大学の社会共創活動<sup>※1</sup>

流通科学大学(神戸市西区)は、『流通を科学的に研究教育することを通じて、世界の平和に貢献し、真に豊かな社会の実現に貢献できる人材を育成する』という建学の理念のもと1988年に創設された大学である。商学部(定員450名)、経済学部(同200名)、人間社会学部(同250名)の3学部から構成され、約3700名の学

生が在籍している。

大学の設立当時よりビジネスパーソンを育てることを目的としており、近年は『知識重点型』から『知識を知恵に変換できる』人材の育成に焦点をあて、創設時より訴求し実施してきた『実学』アクティブラーニングを重視した授業内容を実践している。

こうした実学の中心的な役割を担っているのが、社会共創活動(社会共創プログラム)である。これは、学生自身が考え調査し、仲間と協力しながらマーケティングの知識を生かし、企業・地域・自治体が抱える課題解決に取り組む活動である。2022年度は、32の社会共創プログラムが提供され、社会共創活動報告書(2022)によれば、26名の教員が44の活動に参画している<sup>※2</sup>。学生が希望さえすれば、年間を通じて、企業・自治体を問わず豊富なプログラムのなかから希望するプロジェクトを選ぶことができる。今でこそ、多くの大学が企業や自治体と連携した社会連携事業に取り組んでいるが、流通科学大学では、筆者が着任した10年前より既にこうした取り組みが盛んに行われており、印象的であった。

## 2 物流分野における社会共創活動のチャレンジ

44の活動の連携先は、企業19件、自治体18件、企業と自治体の連携3件、商店街4件であり、企業と自治体の件数が多くなっている。それほど数は多くないものの、商店街との連携が一定数あるのは、地域商業も学べる本学の特徴の一つといえよう。活動内容でみると、企業とは商品開発やイベント企画が多く、自治体とは地域活性化型がほぼ全てである。これは、「マーケティング論」「製品戦略論」「消費者行動論」(以上、商学部科目)や「地域まちづくり概論」(経済学部科目)、さらには「観光事業論」(人間社会学部科目)などの講義で学んだ専門知識と活動内容がリンクし、学生が事業提案をしやすいためと考えられる。

筆者の専門はいちおう物流であり、「教養特講Ⅰ(物流)」と「サプライチェーンマネジメント論」を担当しているものの、商学部マーケティング学科に所属していること、かつ学生のニーズも高いという理由から企業との商品開発やイベント企画といった社会共創活動を選択することが多かった。といっても商品開発に関する専門的知識に乏しく、ゼミ生に対して申し訳なさを抱きながらゼミ運営

を行っていたことも事実である。それでもゼミ生がいくつかの賞を受賞した時にはとても救われた。

商学では、物流・ロジスティクス関連科目の重要性が論じられることが少なくない。近畿大学の高橋愛典教授は、「大学において物流・ロジスティクス関連科目は、商学系統の学部・学科に置かれることが多く、このことがロジスティクスの研究・教育に与える影響は大きい」と指摘している。また、関西学院大学の伊藤秀和教授は、商学教育における交通・物流関連科目の位置づけを整理した上で、「社会科学としてロジスティクスを学ぶ利点は、経営手法や会計やファイナンスなど、現実のビジネスに密接に関わる内容を横断的・体系的に学習できることにある」と指摘している。なお、両氏はいずれも商学部にて物流・ロジスティクス科目を担当している。

本学でも、大学院を含めると7つの物流・ロジスティクス関連科目が開講されている。特に「物流概論」は、商学部マーケティング学科の基幹科目に位置付けられている。また、2022年度の卒業生の45%が運輸業に就職しており、運輸業の内訳の多くは物流関連企業であることから物流・ロジスティクスにニーズは少なくないはずである。

しかし、物流・ロジスティクスに関連した社会共創活動を実現してみたいと思いつながらも、具体的な実施までは至らなかった。

### 3 コイズミ物流との取り組み

そんな時、2021年10月、コイズミ物流から社会連携の依頼があった。担当者は、営業本部新規事業推進室の兵庫室長である。氏の所属からもわかるように、最初の依頼内容は、物流分野の新事業のアイデアを若い学生から柔軟かつ自由に発案してほしいとのことであった。しかしながら、ゼロベースで新事業のアイデアを出すことはハードルが高いこと、テーマを絞らずに提案した場合、提案内容が分散してしまう心配があった。そこで、物流現場が実際に抱えている課題を解決する取り組みにして欲しいとの要望を伝え、協議したところ、次の3つのテーマ(①物流センターの改善、②労働環境の改善、③物流企業のPR方法)に決まった。物流システムに関するゼミを運営している商学部李准教授にも参画いただき、2ゼミ計23名(3年生)でコイズミ物流との社会共創プロジェクトが翌2022年4月よりスタートした。主なスケジュールは以下のとおりである。

- ・5月28日(土) フィールドワーク  
(1回目の物流センターの見学)
- ・7月22日(金) 大学にて中間発表
- ・9月20日(火) フィールドワーク  
(2回目の物流センターの見学…  
ハンディターミナルなどを使った  
物流業務の疑似体験)
- ・10月29日(土) コイズミ物流本社にて最終発表

フィールドワークは、大阪南港の物流センターで行われた。そこには、関連企業のコイズミ照明の商材が中心に保管されていた。1回目の見学では、物流センターの機能の概略とともに、荷物の管理方法であるロケーション管理の考え方、荷役機器であるパレット、ネステナー(可動式の棚)の説明、電動フォークリフトの実演が行われた。特に、高い位置に積み重ねられた荷物を垂直移動も可能なフォークリフトを使って荷役する様子には学生から歓声があがっていた。

中間発表では、1回目のフィールドワークの視察結果を踏まえ、2ゼミ6チームから「新たな技術の導入による施設改善」や「業界のイメージ改善」、「若い世代への情報発

信やPR」などの学生目線の提案を行った。これらの発表に対し、企業担当者からは「どうしたらコイズミの魅力を伝えられるか。より具体的な提案を期待したい」とのコメントを頂いた。学生からは、「物流に関する知識不足を痛感し、より深く学びたいという学習意欲が刺激された」という声や「数値的な根拠に基づいた提案の重要性に気づかされた」という意見が聞かれた。

2回目のフィールドワークは、前回と異なり平日に実施した。このため、通常業務が行われているなかでの見学であった。また、ピッキング作業や入庫管理に使用されているハンディターミナル(片手で持てるハンディサイズのデータ収集端末)を使って、庫内業務の疑似体験も行った。

2回のフィールドワークと中間発表、約半年間をかけて3つの課題テーマに対して、コイズミ物流への最終提案を実施した。以下、6チームの提案内容の題目である。田中ゼミ3チーム(A…創荷による積載率の向上案、B…滞在在庫の有効活用案の提案、C…物流センターにおけるDX)、李ゼミ3チーム(D…物流業界PRの提案、E…コイズミ物流の労働環境改善の提案、F…RFID技術活用案の提案)。企業の方からは総じて前向きなコメントを頂いた。現実

こんなに甘くないよと思いつながらも、お互いにとって初めての取り組みであり、お気遣い頂いたのかもしれない。あくまでも私見ではあるが、半年間での学生の成長も感じられ、物流企業との社会共創活動という新しいチャレンジは成功であった。



[写真1] 物流センターの見学の様子



[写真2] 企業への提案の様子

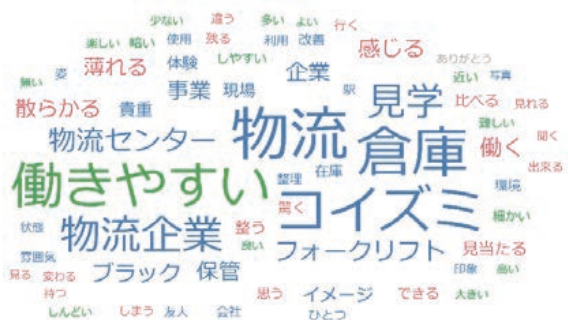


#### 4 学生の成長に貢献できたのか？

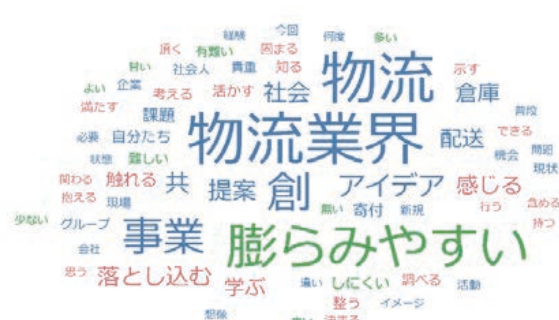
プロジェクト終了後、田中ゼミの学生に対して、①物流センターの見学の感想、②社会共創活動の感想、③社会共創活動を通じて成長したと思う点、④社会共創活動に参加して感じた課題、を自由記述で回答してもらい、テキストマイニングによる分析を試みた。

大半の学生が物流センターを見学するのは初めての経験であり、労働環境にネガティブな印象を持っている学生もいたと思うが、そのイメージは見事に覆された。整理が行き届いた物流センターでは、ほぼ一人一台のフォークリフトにより肉体的負担も軽減されていた。これが、働きやすいというワードに集約されている。

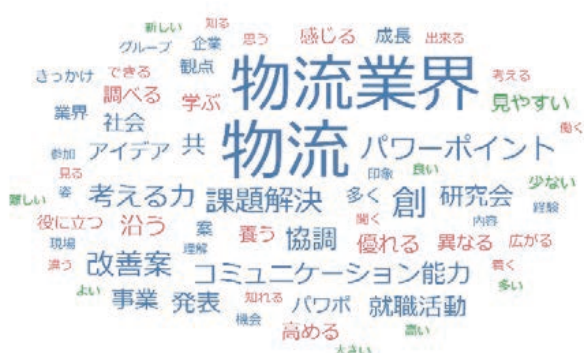
物流業界との社会共創活動に取り組むにあたって、物流現場を生で視察できたことは、提案内容(アイデア)を膨らませることに大いに寄与していることがわかる。社会共創活動を通じて成長したと思う点については、物流業界に対して、課題解決・改善案をチームのコミュニケーション能力を高めながら取り組んだ様子がみえる。一方で、課題として定めにくいというワードが目立つ



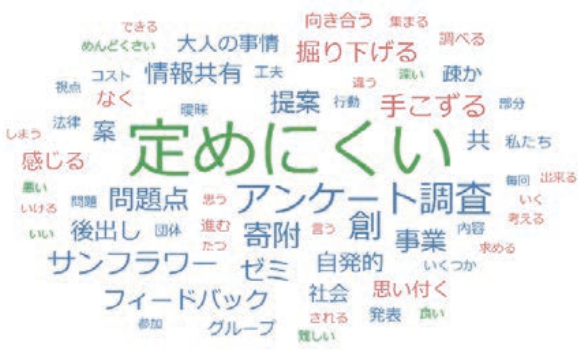
①物流センターの見学の感想



②社会共創活動の感想



③社会共創活動を通じて成長したと思う点



④社会共創活動に参加して感じた課題

[図] 学生の自由意見のテキストマイニング

た。現場視察がアイデアを膨らませるのにポジティブに働くことと矛盾するよう感じるが、学生と接する中で聞かれたのが「問題点が見つからない」という声であった。たしかに、コイズミ物流の物流現場の完成度は高く、大きな問題があるようには感じられなかった。ただし、これについては、提案内容の切り口に新しい角度をつけさせる教育ができなかった指導教員(筆者)の力不足と感じている。

今回のプロジェクト全体を通じて、担当者の兵庫氏からは何度も大学に足を運んでいただき、丁寧なフィードバックを頂いた。これは、大変ありがたかった。兵庫氏のサポートに対して感謝の言葉を伝える学生も多かった。

荷主の意向もあり、この10年間で物流センターの見学が難しくなっている。そうした中、学生に貴重な機会を提供してくれたコイズミ物流に改めて感謝申し上げる。

今回取り組んだ学生(現4年生)の就職に直結しなかったことは残念であるが、今年度も新たな3年生と一緒にプロジェクトは継続中である。さらに、今年度はインターンシップの実施も検討頂いている。物流・ロジスティクスの社会共創活動に取り組んだ学生が、物流業界が抱える問題を解決できるキーパーソンとして巣立ってくれることを期待している。

〈注〉

- ※1 他の大学では、社会連携事業と呼ばれることも多い。本学もかつては、社会連携事業と呼んでいたが、数年前より社会共創活動と呼んでいる。
- ※2 すべての活動について報告書をあげているわけではないため、実際にはもっと多くの教員・学生が参画している。また、1つのゼミが複数の異なるプログラムに参加しているケース、1つのプログラムに同一ゼミから複数チーム参画しているケースもある。

〈参考資料〉

- 伊藤秀和(2012)「社会科学におけるロジスティクス教育体系への試み」『商学論究』関西学院大学商学研究会、第60巻第1／2号、pp.333-377.
- 高橋愛典(2009)「ロジスティクス研究の方法に関する試論―商学の視点から―」『商経学叢』近畿大学商経学会、第56巻第1号、pp.483-507.
- 流通科学大学社会共創活動報告書  
<https://www.unnds.ac.jp/social/collaboration/report/>

「私大連フォーラム2022×大学時報連動企画」

## 地域文化を リノベーションする教育実践

齋藤 知明

大正大学客員准教授

### はじめに

東京都豊島区の北部、西巣鴨に大正大学はある。東には、全国でも有数の商店街の一つ巣鴨地蔵通り商店街があり、江戸六地蔵やとげぬき地蔵、巣鴨庚申塚などの宗教施設で有名な巣鴨地域、西には稻荷湯や亀の子束子西尾商店、トキハソースなど創業100年近い企業が点在する滝野川地域。その間に大学は位置している。また、大学の南門は旧中山道に面しているが、江戸時代から戦前にかけて、巣鴨から滝野川までの区間は「種子屋通り」と呼ばれるほどたくさんの種苗問屋や販売店が立ち並んで

いた。ここでは「滝野川ゴボウ」や「滝野川ニンジン」などの多くの伝統野菜の品種が有名である。

このように豊富な地域文化を教育資源として活用し、さらには地域の新しい価値として発信していこうという教育実践がある。その名も「すがもプロジェクト」。大正大学周辺地域を広く「すがも」と設定し、毎年、学部学年を超えた20〜30人ほどの学生が活動している。

2020年度から続くプロジェクトだが、2023年度では5つのテーマで活動がおこなわれている。祈りの文化を発見・発信する「祈りのまち」、伝統野菜も扱いながら都市型農園を実践する「キャンパス農園」、近隣の銭湯をコミュニティの場として再構築する「銭湯コミュニティ」、そしてそれらの活動で発見された地域文化を市民に観光資源として活用してもらう「観光」、さらには学生やその保護者に限定して地域とつなげる活動を展開する「ユナイト」。ここでは、大正大学の地域貢献の歴史を概覧したのちに、個別の活動や学生の学びを紹介したい。

### 1 100年前からの社会貢献活動

2026年に創立100周年を迎える仏教系大学であ

る大正大学が、この地域で社会貢献活動をしてきた歴史は長い。大正大学の前身である宗教大学(専門学校)時代から「セツルメント運動」などの社会活動が盛んであり、一方で「魂祭たままつり」といった地域に開かれた慰霊追悼行事も開催されていた(後者に関しては、現在でも「鴨台盆踊り」として、市民参加型の宗教行事という理念を継承して実施されている)。

大学創立後も社会に目を向けた研究・教育・実践がおこなわれていたが、21世紀を迎えた頃から、さらに学びのフィールドを地域に展開した活動が盛んになる。大学の使命としての「社会貢献」が重視され始めた2005年には、NCC(ネクストコミュニティコース)という学部横断型の副専攻が開設され、カリキュラムとして社会貢献活動が実施されるようになった。

そして、東日本大震災が起こった2011年にこの動きは加速した。大正大学は宮城県南三陸町を中心とした震災被災地へのボランティア活動をいち早くおこなった「写真1」。その後も大学間ネットワーク「私大ネット36」や「一般社団法人南三陸研修センター」創設の中心的役割を果たし、南三陸町での継続的な支援活動につなげた。この支援活動で多

くの成果を残したことを契機に、学びのフィールドは広域化する。今では、100を超える全国の自治体と連携協定の締結を図り、その流れから地域創生学科や公共政策学科を中心に、全国各地で実習をおこなうカリキュラムが構築された。

一方で、大学周辺での動きも発展を見せた。大学が位置する豊島区との共創事業が展開され、それとともに全学生が「サービスマーケティング」という授業の履修が可能となり、誰でも社会貢献活動に参画できるようになった。地域の課題を発見し、それをどのように解決できるのか。あるいは、地域の魅力を発掘し、それをどのように効果的に発信できるのか。様々な学部学年の学生達がチームをつくり、個々人の専門的な学びを活かす多様な活動が展開された。



[写真1]震災直後の支援活動

## 2 コロナ禍でのフィールドワーク

2010年代は、地域を学びのフィールドとした教育実践が大正大学の特徴として定着をみせた10年であったともい



えよう。そして、創立100周年となる2026年に向けて、大学・学生によるさらなる地域活性化を図るため、2020年度から、「サービスマーケティング」の一環で、しかもプロジェクトが始まった(現在は「地域プロジェクト」と授業名を変更)。

すかもプロジェクトの特徴を挙げると次の通りである。

①全学部の2年生以上の学生が履修できる。

②各テーマで1人担当教員がつく。

③教員だけでなく職員もチームの一員として関わる。

④教員と学生の間には、リーダー的役割のSPS(すかもプロジェクトスタッフ)を配置し、自立した活動を促進する。

⑤1年間の活動として事前に計画・予算を立て、それに沿って活動をする。

⑥基本的に班ごとの活動となるが、必要に応じて班を超えた連携や協力も積極的におこなう。

①と⑥は、従来の「サービスマーケティング」の特徴を継承しているが、それ以外はすかもプロジェクトが開始される際に、あらためて設定された。特に、③の職員の参加によって、活動の幅が大きく広がったともいえる。

班に必ず、部署を問わず「コア職員」という名の各テーマの進捗を管理する職員が1、2名、それ以外の職員が数名配

置される。この体制により、学内外の調整・共有が格段に円滑となり、教員は学生指導に集中することができる。また、学生にとっても学内やコミュニケーションツール上で、職員と気軽に相談や情報共有をおこなう様子が見て取れる。

さて、開始時に話を戻そう。すかもプロジェクトが開始されたのは2020年である。つまり、新型コロナウイルス感染症の流行の始まりでもあり、緊急事態宣言下でオンラインでの授業運営がおこなわれた時期でもある。大学周辺のすかも地域をフィールドに、様々な実践を展開しようとしていた矢先、そもそも大学生は大学にすら来られなくなってしまうのである。

しかし、オンラインでもできることはないかとそれぞれの班で検討し続け、夏頃からはオンラインでつないだ現地の市民に地域を紹介してもらおうオンラインツアーが実施された。その後、規制が徐々に取り払われて、大学に来ることが可能となつてからは、学生自身で



[写真2] すかもプロジェクト独自の広報ツール「あるきめでいあ」

地域を紹介するオンラインツアーや学生間での地域活動などが展開された。

この時期の活動は、すがもプロジェクトの班の一つであった「メディア」によって、ブログSNSであるnoteをプラットフォームに「あるきめでいあ 大正大学すがもプロジェクト」の名前で広報・記録されている「写真2」。

### 3 地域文化の発掘と発信

2022年度より対面授業に戻ったことから、市民と連携した活動に対しても一定条件下で可能となった。そして、2023年度からはあらゆる制限がなくなった。ここでは、この2年間での特徴的な活動を3点紹介したい。

#### (1) 祈りのまち

巣鴨には信仰や観光などで近隣からも遠方からも訪れる人が多いが、それに加えて、仏教系大学として独自の宗教施設や宗教者を有す大正大学の特色を生かし、すがも地域全体で「祈りのまち」を形成して、地域全体での新たな価値を打ち出そうとしている。すがもプロジェクト開始時より継続的に活動をおこなっており、現在では、月に一度の「御朱印浄書」、御朱印帳の作成および販売、大正大学

内の宗教施設である鴨台観音堂（さざえ堂）の案内、祈りのまちマップの制作・配布と祈りのまちの散策ツアーなど、様々な仕掛けを展開している「写真3」。

#### (2) キャンパス農園

こちらもすがもプロジェクト

開始時より継続している活動である。大学内のデッドスペースとなってしまうわずかな土地や空間を活用して、季節に合わせて多くの種類の野菜を育てている。そして、学生や地域の方々が作付けや収穫を共にし、さらに収穫時の廃棄部分を再利用したワークショップなどを通して、環境教育、食育、農育等を学ぶことを目的に活動している。また、すがも地域における伝統野菜に関する啓蒙もSNS上でおこなうなど、地域文化に目を向けた活動も同時におこ



[写真3] 祈りのまちマップ



[写真4] 伝統野菜の紹介スライド

なっている「写真4」。

### (3) 銭湯コミュニティ

この班は、2022年度から新たに活動が始められた。滝野川には「稻荷湯」という創業100年近い銭湯がある。映画のロケ地としても有名であり、2020年には国の登録有形文化財に指定された。また、銭湯にはこちらも築100年ほどの長屋が隣接されており、稻荷湯と一般社団法人せんとうとまちとが連携してリノベーションをおこない、2022年にコミュニティカフェとして生まれ変わった。このカフェを用いながら銭湯を中心とした新たなコミュニティを形成することが、この班の目的である。現在では、バスボムづくりワークショップ、イベントと運動しての休憩所の運営など、様々な取り組みが展開中である「写真5」。



[写真5] 長屋カフェでのバスボムワークショップ

## 4 新たな価値の創造

これらの活動に共通する点は、地域の文化・歴史を重視

するとともに価値を再編集していることである。冒頭に挙げたような地域の特色を一つひとつ発掘しつつ解きほぐし、学生・教職員がチームとなって現代を生きる市民にも伝わりやすい形に変えて発信をしている。

主観的な分析となるが、このように地域文化をリノベーションすることで、活動の最初期から地域の方々を受け入れてもらいやすいという点を実感した。新しいイベントや拠点をつくることも地域活性化の一つだが、浸透には時間がかかり、1年間の授業の活動として完結させるのは難しい。それゆえ、地域の風景を変えずに今ある文化を保全・活用する活動こそ、他の地域にはない魅力を増強でき、かつ、教育実践としても非常に適切だと実感した。

そして、2022年11月には、すぐプロジェクトの各班が運営・企画をおこない、「種子地蔵縁日(たねじぞうえんにち)」という新しいイベントを開催した。このイベントは、観光庁における「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」の採択事業の一環であり、「伝統野菜」を通し、学内で「農と食と歴史」を感じるマーケットやワークショップ、ガイド付きのキャンパス農園ツアーを実施した。これに先んじて「種子地蔵」の開眼も

おこなわれ、祈りと歴史を学べる新たな観光の形として展開した「写真6」。今後も「種子地蔵縁日」は、地域文化をリノベーションした地域のイベントとして、継続していく予定である。



[写真6] 種子地蔵と法要

## おわりに

これらの活動に対して、学生はどのように学びを得ているのか。最後にそれを伝えて本稿を閉じたい。すかもプロジェクトの多様な活動は、半期ごとに報告書としてまとめられる。そこで書かれた学生たちの所感の内容は次の3点に大きく整理できる。

- ①リーダーシップの獲得
  - ②スケジュールマネジメントの重要性
  - ③自分が住む地域への応用
- 学生の所感を一つ紹介しよう。

プロジェクトでは、今までのように何かの指示を待つて

いても何も始まらないことがわかった。一方で、何かをしたいと思えば、先生や職員の方々はとても支援をしてくれる。このような環境を活用しつつ、「率先行動者」として行動をすることによって、周りを巻き込んでいく必要性を感じた。(中略)現在、自分が住む地域の組織で役員として関わることができたので、この経験を活かして活性化を図りたい。

大学周辺地域でおこなう社会貢献活動は、ここだからできるものでも、ここだけで完結するものでもない。地域の課題を解決する／地域の魅力を発信する、という理念はどの地域においても普遍的な作業である。

ChatGPTなどのAIが発達し、急速に生活に浸透している。我々は今後、加速的に変化する超スマート時代を生きる必要がある。そのようななか、人間にしかできないのが、喜びや苦しみへの「共感」であるといわれている。「共感」ができる人間となるためには、様々な「行動」「経験」が必要である。そのような人材を育成することを目的に、地域における社会貢献活動をおこなう教育実践をさらに発展させていきたいと思う。